

現代文・古文・漢文の連携を図る
＜3年計画の3年次＞

筑波大学附属駒場中・高等学校 国語科

石川 祐爾・鹽谷 健・鈴木 信好
須藤 敬・関口 隆一・平田 知之
福田 孝

現代文・古文・漢文の連携を図る

(三年次計画の三年次)

筑波大学附属駒場中・高等学校 国語科

石川祐爾・鹽谷健・鈴木信好・須藤敬・
関口隆一・平田知之・福田孝

要約

本校国語科では一昨年より三年間にわたって「現代文・古文・漢文の連携を図る」という主題で研究に取り組んでいる。本稿ではその第三年度として、そのような主題を設定した経緯と、さらに主題を踏まえた試行的実践例とを報告したいと思う。

キーワード：国語教育，

1 はじめに

本校国語科では本年より三年間にわたって「現代文・古文・漢文の連携を図る」という主題で研究に取り組んでいる。初年度は、そのような主題を設定した経緯をまず説明し、現代文（「言葉と力」）・古文（「江戸のことは」）の二つの試行的実践例を報告した。また、二年目は、漢文（「史記」）を主たる教材として取り上げ、現代文分野（丸山真男『「である」ことと『する』こと』及び夏目漱石『現代日本の開化』）、古文分野（『大鏡』と『栄花物語』）と連携して、歴史叙述について考えさせる実践を紹介した。本年は、三年目として、更に現代文、古文の試行的実践例を紹介したい。

2 試行的実践例

① 中学校 1 年 古文『竹取物語』

[日時] 1999 年 11 月 15 日（金） 第 1 校時

[授業者] 福田 孝

[授業クラス] 中学 1 年 男子 41 名

[教材] 『竹取物語』（本文・訳は全対訳日本古典新書『竹取物語』を適宜改め省略して使用）

[教材設定の理由]

絵本などであらかじめ知っているお話を用いて抵抗感なく古文を読ませようという意図であろう、『竹取物語』は現行の教科書でも多く扱われている。本授業も同様に考えて『竹取物語』を扱ってみた。と同時に、教科書で想定されているより多くの本文を準備してみた。自分が知っているお話とどのように異なるのかを物語の筋を追う形で理解させるため、また音読を重視して或る程度の量を読み古文に慣れさせるため、である。

現在使用している学校図書館の教科書では、月の世界と地上の世界との対比に重点を置いての説明がなされている。『竹取物語』はこの対比に留意して読むことで、絵本で知っている話とは異なった理解の仕方、古文を学習することの意義が理解できる教材であると思われる。（そのために、あらかじめ古事記『海幸山幸』と万葉集『浦島子の長歌』を読んでいる）。

授業数の減少に対処するための現代文との連携という点では、古代日本語と現代日本語との共通点・相違点に気づかせ、普段は意識しないで用いている日本語に意識を持たせ、今後の文法指導などの基礎づくりを行なうことが可能であろうと考えている。（現代文側の補助教材としては大野晋『日本語はどこからきたのか』ポプラ社（授業実施時。現在では中公文庫に入っている）の一部を授業で扱ってもらった）。

Thinking about the relation of the present age sentence, the ancient writing, and the Chinese writing.

〔授業展開〕 全七時間

- 第一時 物語冒頭部分のプリントを読み、かぐや姫の不思議な性質を理解しながら内容を理解する。
- 第二時 五人の貴公子の求婚譚のあらましを知った上で、阿倍御主人の挿話の前半を読み、内容を理解する。
- 第三時 阿倍御主人の挿話の後半を読み、内容を理解する。語源説話のあらましを知る。
- 第四時 六人目の求婚者である帝とかぐや姫の話を知った上で、十五夜近くの月を見て悲しむ挿話を読み、内容を理解する。
- 第五時（本時） 八月十五夜に朝廷から警備の兵士たちがやってきてかぐや姫を守るあたりを読み、かぐや姫の発言内から異界の評価の仕方が『浦島子』や『海幸山幸』などと異なることを理解する。
- 第六時 月からの迎えの人々が現われるあたりを読み、内容を理解する。
- 第七時 物語末尾を読み、翁軀の悲しみ・帝の悲しみを理解し、また帝が富士山で不死の薬を燃やすことの意味を考えてみる。

〔指導の目標〕

- 一 古典に触れて昔の人の考え方などを読み取り、わが国の伝統文化について理解する。
- 二 古文の文章に読み慣れ、音読する能力を身につける。
- 三 古文の本文と訳文とを照らし合わせて古文の本文の内容を理解する能力を身につける。

〔本時の計画〕

A. 目標

- 一 『竹取物語』中、朝廷から警備の兵士たちがやってくるあたりを読解して、内容を理解する。
- 二 異界への評価が『浦島子の長歌』や『海幸山幸』などと異なることを理解する。
- 三 古代日本語と現代日本語との共通点・相違点に気づかせ、普段は意識しないで用いている日本語に意識を持たせる。

B. 展開

・本文朗読

前時の復習をし、プリント5の本文を音読する。

- ・前時に読んだプリント4の内容を思い出させ、プリント5の内容がその延長線上にあることを理解させ

る。（前時の終わりに、あらかじめ自宅で音読し予習しておくよう指示する。複数の生徒を指名する。）

・内容把握

(a) まず第一段落の内容を理解する。（訳を配布する。）

・「勅使」という言葉や「二千人」という人数から、どれほど大がかりな警備であったかを理解させる。かぐや姫のいる位置を確認させ、いかに厳重に警備していたかを理解させる。以上から、警備の兵士や翁の自負を理解させる。

(b) 第一段落の文章をもとに現代日本語と古代日本語との共通点・相違点を理解する。

・現代文で扱った教材中の文と、プリント5第一段落中の文との共通点・相違点を指摘させる。椎名誠「風呂場の散髪」の中の文と『竹取物語』の中の文との対比では、具体的には「わたしは彼が腹を立てているらしい、ということを知って、わたし自身も少し腹を立て始めていた。」と「翁、これを聞きて、頼もしがりやを。」とを、「岳はまた右足の親指でゆっくりタイルをなぞり始めた。」と「長き爪して、眼を掴み潰さむ。」とを比べ、その文構造の類似を理解させ、助詞の有無による相違も理解させる。

（大野晋『日本語はどこからきたのか』23頁中「全体的には日本語として古文の文法と現代の文法はつながっていて、漢字によってたくさんの中国語をとり入れたにもかかわらず、文法は影響をうけませんでした」を現代文で読んでいるので、これをまとめとして使う。）

(c) 第二段落の内容を理解する。

・かぐや姫の発言中三文目以降が、何を主眼にしたものであるかを理解させる。（かぐや姫の発言中の「まかる」といった理解しづらい言葉に留意しつつ、翁の「胸痛きこと、なのたまひそ」という発言をポイントとしながら、訳を参照させて内容理解を容易にさせる。「今年ばかりの暇」という言い方に注意させる。）

(d) かぐや姫の発言中の「月の都の人」についての言及から、今までに習った「海幸山幸」「浦島子」のお話と、異界・地上界との性格付けが同質であるにもかかわらず、その位置付け・価値評価が異なることを理解する。「海幸山幸」「浦島子」での理想郷としての異郷と、理想郷でありながら人間味にかけるつまらない異郷と把握してかえって地上のほうが肯定される「竹取物語」との違いを理

解させる。(図を書くことで理解を容易にするよう、留意する。)

・かぐや姫の「さる所へまからんずるもいみじく侍らず」という言い方をポイントとして、考えさせる。

(「老い衰へ給へるさまを見奉らざらむこそ、恋しからめ」という発言に注意させる。)

・まとめ

古文を読む意義について確認させる。またプリント6を配布して次回までに読んでくるように指示する。

[参考文献]

- 全対訳日本古典新書『竹取物語』創英社
日本古典文学全集 『竹取物語 伊勢物語 大和物語 平中物語』小学館
新日本古典文学大系『竹取物語 伊勢物語』岩波書店

(今回の試みについての検討)

研究テーマは、時間数が減っていく現状に対して現国・漢文・古文で連携をはかり対処しようとする研究から発想されたものである。内容面での連携は思いのほか難しいという点から、自分たちが日ごろ使っている日本語について考えをめぐらせる一助としようとして企図された授業であった。その意味で今回用いた『竹取物語』でなく他の古典教材でも同様の扱いは可能であろうし、他学年でも同様の扱いは可能であろう。研究授業の対象学年は一学期に仮名を用いずに漢字のみで作文を書かせてみたりして昔の言葉と現代語とを比較する作業を行っていたためであろうか、研究授業で扱った「風呂場の散髪」の文と『竹取物語』の文との構造の一致という指摘について比較的すんなり呑み込めていたように感じられる。この研究授業の延長として、この学年には中二になって『平家物語』を学習した際に、『竹取物語』と『平家物語』と「走れメロス」、それぞれの部分を提示して含まれている漢語について確認をしてみて、『竹取物語』が漢語はほとんど無く和語だけで書かれているのに対して『平家物語』と「走れメロス」の含む漢語がほぼ同様の様相を呈していることを確認させてみせたりしている。扱い方はさまざまであろうが、古文の授業も内容面での文化・伝統の継承といった面に焦点をあわせるだけでなく、自分たちの言語生活を振り返らせる良き対照とする用い方も考えてよいのではないかと思う(従来のように読解の

ための古語の文法を扱いながら、現代日本語と古語との対比を考えさせるというのばかりでなく)。

また教材としての『竹取物語』であるが、研究協議会の席でも話題に上がったように『竹取物語』といった昔話に現代の生徒は小さいときから親しんでいるわけではないようである。むしろテレビなどを通して親しんでいる漫画や外国のキャラクターのことしか知らない場合が多い。従って昔話を通して知っているであろうから『竹取物語』を導入の古典教材として扱うといった安易な思考法も取れなくなっているのも事実である。『竹取物語』自体はけっしてつまらないお話しではないのだから教材として扱うには十分であると思われる。が、既存の知識を助けとしながら『竹取物語』を扱うというのではなく、全く知らないお話しとして『竹取物語』を扱い、研究授業で扱った箇所を、地上と異界との物語として扱い、現代における異界に対する考え方と照らし合わせながら『竹取物語』の異界観の面白さを理解させるといった風に扱う扱い方に転じていくべきなのかもしれない、と感じつつある。

② 高校2年 現代文 「日本人の知性」中村 光夫

- [日時] 1999年11月15日(金) 第2校時
[授業者] 鈴木信好
[授業クラス] 高校2年 男子41名
[教材] 「日本人の知性」中村光夫

[教材設定の理由]

現代文で扱われる論説・評論文の教材では、近・現代の日本社会の諸問題が多く取り扱われている。そのなかで、教育課程の改革に伴い、丸山真男の『「である」と「する」こと』がいくつかの教科書で教材として復活している。

この教材の意味・価値は、昭和三十二年の文ではあるが、近代を成立させている民主主義と、基本的人権についての意味を説き、更に日本社会の問題点を歴史的特質との関係から明らかにしているところにある。

しかし、この教材を扱うとき、生徒の側の理解を難しくしていることが、まとめれば二点あるだろう。

まず、筆者が講演を行った必然性、つまり、当時の日本の社会状況と聴衆としての日本人にたいする認識。更に、その聴衆が戦後の近代化の中で民主主義の担い手としてどのように成立したか、また、日本の近代化の歴史の中で、市民としての存在はどのようなことであるのかということである。

これらの点に対して、本教材を扱うことで、江戸期の支配階級であり、明治維新において官僚として近代化を担った武士階級について考え、その対蹠にあった明治の平民の文化を知ることにより、近代化の出発点である明治維新時の日本の文化的実情とその後の社会変化についての理解をすることができ、丸山と中村の二つの文章を相互補完的な関係に置けると考える。

古文・漢文との連携という面で考えれば、本教材を含む日本の近代化に関する評論、論説の多くが、近代化以前の日本文化との連続性と断絶性に言及しているように、思想、教養、文化の全てに渡って関連を考慮しなくてはならないことは自明であろう。今回配付した資料は、生徒に知識の補充させると同時に本文批判について考えさせる事を目的としているが、さらに、日常的な古文・漢文の授業との関連が必要である事の一端を示しているのではないかと考えている。

[授業展開]	全九時間	
第一時	授業の目的・教材解説・全体の構成	
第二時	「知性」の原義と概念について	
第三時	近代における「知性」の特質と「学問」の概念	
第四時	明治期の特質 I	生徒の疑問と解説
第五時	江戸期の特質 I	江戸時代の学問
	・武士階級について	その一
第六時	江戸期の特質 II	江戸時代の学問
	・武士階級について	その二
第七時	明治期の特質 II	階級による文化的格差・翻訳について
		その一
第八時	明治期の特質 III	階級による文化的格差・翻訳について
		その二
第九時	まとめ	

[本時] (第六時)

生徒の知ることの少ない江戸時代の武士階級の教養、生活の実体を、本文の理解のために資料により理解させる。

同時に、本文批判の必要性を、読み手の立場とともに考えさせる。

[関連教材]

「日本の宿命」	西尾 幹二
「世間とは何か」	阿部 謹也
「ベルツの日記」	E・ベルツ

「現代日本の開化」	夏目 漱石
「創造力のゆくえ」	加藤 周一

[資料]

『解体新書』	翻訳時の漢字についての分類・分析一覧
--------	--------------------

[参考資料]

「貞享改暦」	『元禄の演出者たち』朝日選書	朝日新聞社
	暉峻康隆	
『京都東町奉行日記』	安政五年編	
	岡部豊常	新人物往来社
「諸生規矩階級、読書路徑」	『図書』	
	津田左右吉	岩波書店
『一九〇〇年前夜後夜譚』		
	大岡信	岩波書店
「短歌と浪花節」(対談)		
『短歌と日本人 IV 詩歌と芸能の身体感覚』		
	朝倉喬司 富岡多恵子	岩波書店
「欧米における事物概念の翻訳」	『文学』	
	一九八〇・一一 森岡健二	岩波書店
「歴史教育について」	『歴史』日本の名随筆	
	柳田国男	作品社
「日本の歴史家」	『歴史』日本の名随筆	
	川崎庸之	作品社
『路地裏の大英帝国』	イギリス都市生活史	
	角山榮	平凡社
「西鶴と現代作家」	『図書』	
	臼井吉見	岩波書店

(今回の試みについての検討)

公開授業後に行われた研究協議会でも述べたが、参加者の方にある程度授業の流れを理解をして頂けるように、前回までの授業内容を振り返ったため、生徒に対する発問ができなくなり、また、生徒からの質問の時間も少なくなってしまったため、授業がどの様に生徒に受け止められているかについてはっきりと示せなかった点は、反省すべき材料となった。

指導案の[教材設定の理由]でも触れたことだが、現代文の教材(論説・評論文)では、当然のこととして近・現代の日本社会の諸問題が取り扱われている。この教材を国語(科目としての現代文、また国語I・II)で扱うことは、現代を生きる生徒が、内容の理解をした上で(最終的には)自己の問題として自覚的に考え取り組むことを期待するということであろう。内

容を捨象した国語（言語・言語表現・表現行為・文章を扱う教科として）の授業はありえないことは贅言を要しない。

授業では、本文の読解が必要なことは言うまでもないが、高校二三年生で扱うの論説・評論文での内容理解は表現された本文のみで内容把握が可能であることはまれである。単語の段階から始まって様々の知識、多面的な分析が要求される。

その意味からも「現代文・古文・漢文の授業の連携」は、研究のために恣意的に設定された題目ではなく、国語という教科そのものが持つ、基本的な問題、課題なのである。その点から見ると、近代化の当時、それを可能にした要因について考えている本教材は国語のとしても重要なそして有効なものと言える。

近代化の過程は、西欧からの文化の移入とされるが、言語的ギャップの克服が不可欠であり、そこにおける日本語への翻訳の様態に日本の特質を見ることが出来る。つまり、事実としての翻訳が漢語によるものであることは、国語の問題であるとともに、日本の社会の在り方を明確に示す指標となっている。

このような筆者の主張を理解させるためには、具体的な社会の構造とその変化、思想・思考を現す言語状況を理解させることが必要になる。そのことはそのまま現代文＝近代、古文・漢文＝近世以前のつながりを考えることである。これは「現代文・古文・漢文の授業の連携」である。

さて、現代文の側から見た近代化に関わる古文との関わりは、意識的にまた、時代を中心として近代化を担った知識階級＝支配階級＝旧武士階級と一般大衆＝庶民＝被支配階級のそれぞれと相互の関係の理解に関わるものとなる。

ここで考えたことは、普通の古文の授業では扱われない側面の知識の補充と実体の二面を、二つの階級それぞれとその関係において理解させることであった。古文の授業では扱われることの少ない、古今和歌集の和歌的伝統の意味と江戸時代の教養の在り方や、明治時代の『東京日々新聞』と『朝日新聞』の記事の比較等の資料は、その観点からのものである。

ここでは、単に古文と言うだけではなく、日本史との関連等他教科との連携をも考慮しなければならないという総合的な問題も含まれているのだが、当面の古文との連携について考えてみたい。

普通、古今和歌集の扱いは、作品としての和歌の解釈を中心として技法や和歌世界の特質の説明と、万葉集、新古今和歌集との関連での文学史的意義の学習

が中心となっている。更に連歌などの中世との関わりと展開、近世の俳諧への影響等が学習内容とされている。

古今和歌集のみならず、これまで教材化されているものが、その特殊性に価値がおかれるか、より普遍的な意味をもち、基本としての意味が重視され（教材の難易度に関係なく）るものであることは当然である。従って、そこから得られる現代文との差異を中心として、近代とそれ以前の比較や関連（断絶を含み）が問題にされてきている。

それに対してここでの扱いは、和歌そのものが支配階級の教養として常識的なであった点を重視している。この面は、古文の教材としても考察の対象としても成立しにくいことは自明であろう。

現代文の側から一例をあげて、新たな連携の必要性を述べてみたが、漢文との関係は、武士階級の教養や思考方法、思想さらには、すでに触れた翻訳に関わる意味等考えるべき条件や内容は多岐にわたっている。

今後の授業を重ねながらより充実した相互関係を考えてゆかねばならないだろう。

3 まとめと今後の展望

本研究は、本来、授業時間数の減少や学習の総合化への対応という観点で始まった。しかし、いくつか実践を重ねるうちに、ことはそう単純な問題では済まないことが痛感された。単にある現代文と関連のある古文・漢文教材を併せ取り上げて、その関連を授業で扱うだけでは、現代文・古文・漢文の関連が図った、といことにはならない。本年度の、特に現代文の実践を見れば分かるとおりに、ある文章を真に理解するためには、社会の構造とその変化、物の考え方の現れであるところの言語の状況を、近代と近代以前のつながりの中で捉えさせなければならない。私たちが三年間の考察と実践を通してたどり着いた「現代文・古文・漢文の連携」とは、すなわちそうした視点を日頃の授業の中で意識する、ということなのである。

知性とは割合に新しい言葉ですが、大体、英語のインテリクト、あるいはインテリジェンスの訳語と考えてよいでしょう。この両者は共に同じラテン語から出て、その原語は「の間」を意味する「インテル」と、「集める、拾う、選ぶ」などの意味の「レイン」の二つに分けられるそうです。

つまり「知性」とは、「二つのもの間で選べない」ということになり、そこから「推し、知覚し、理解する能力」という意味が出てくるわけですが、こういうふうにある言葉をその語源にさかのぼって考えてみることは、その概念をはっきりさせる上で、非常に役立つことがあります。この場合もやはりそうで、以下述べることは、こういうものと意味に比べると、今日我が国で使われている「知性」という言葉や、その内容が、どんな奇妙な変化を遂げているかということとです。

それはともかく、「知性」は、なにも知識階級といった特定の人間だけが持っている特権的な能力でなく、人間が生きてるためにだれも用いなくてはならない一つの機能であり、こういういかめしい訳語を使うより、むしろ「あたまで」でもしたら、原語の意味をよく伝えられたでしょう。

二つのもの間で選ぶ、ということは一つの行為、その行為をする生命を予想します。「知性」は他の本能や感情と同様に、自然がぼくらに生きるために与えた能力であり、この外界の事物を認識し、それについての判断を下す能力なしに、ぼくらは一日も生きられないのです。

例えば、朝、家を出るとき、空を仰いで、今日は降りそうだから傘を持っていこうというとき、一つの知的判断を下しているわけで、またある人の家を訪ねようとして、街から街をたどって行くということも、かなり複雑な知的操作と言えます。

空を仰いで、天気を予測するときには、感覚と経験、一度訪ねたことのある道をまた行くときは、感覚と記憶というふうに、その判断にはどんな単純な場合にも、ぼくらの精神の全能力が参加するのが普通ですが、ぼくらの生涯の大事についての判断、結婚とか、職業の選択も同じことです。

むしろ恋愛は知的な判断ではなく、感情や本能の産物です。しかし、この恋愛のほかに結末を生活の形として現そうかどうかということは、知的判断の対象です。もともとこの判断は当事者の経験や資料の不足で、不確にしてあまり的中するとはできません。そこから知性への不信を唱えた哲学者もいますが、しかしあまり当たらぬにせよ、おみくじで決めるより、できるだけよく自分で考えた上でするほうが、間違いが少ないとするのが現代の常識です。

こんなふうにはくらは、生活の大事小事にいつも知性を働かしているわけですが、その目的は結局、ぼくらが生かすために外界の状況を正確に知ることにあります。それによってぼくらはある場合には、外界に自分を順応させ、他の場合には、外界を自分に居心地よく変えようというふうに、自己と外界との調和を図るのです。

- 1 インテリクト
- 2 Intellect (英)
- 3 インテリジェンス
- 4 intelligence (英)
- 5 インテル
- 6 Intel (英)
- 7 インテリ
- 8 Intellect (ラテン)

特徴的 参る

知性はぼくらがその目的で外界に張ってあるアンテナのようなもので、その使命は外界の状況をできるだけ正確にぼくらの頭の中で再現することにあります。そのために知性は感覚がぼくらにもたらす表象を整理するわけですが、その判断の基礎になるのは経験と知識です。ぼくらの過去の判断を経験として保存し、更にそれを整理した知識を他人と交換します。今日のように文明が進んでくると、ぼくらが人からもう知識は与える知識より圧倒的に多くなります。

その結果、知識と学問を同一視したり、ひどいのは知性と知識を混同したりすることがあるのです。

先に述べたように、知性は人間の生きるための機能には違いないのですが、人間のすべての機能と同様に、その目的から独立した自分自身の欲求充足のための世界を作り上げる傾向が、知性についても、近代において特に著しくなつたので、考えまうによればここに近代のいばん根本的特質があるとも言えます。

近代の諸科学がここに成立したわけですが、これらの生活の必要から切り離され、真理の把握自身を目的とした世界でも、その探究の現場にある知性の姿勢は、生活について判断を下す場合と変わらないのです。

ぼくらが既成の知識に満足せず、それを止むにして未知の世界に挑もうとするかぎり、あることを知ただけでは十分でなく、その意味や既知のものとの関係をはっきりさせなければ、前進できぬわけで、知性は単なる理解力としてでなく判断力として働かねばならないからです。

華田實彦氏が、「凡庸な科学書を読むと、その領域の問題はすべて解決されているような印象を受けるが、読んだ書物では多くのなぞが生か生きと感ぜられる」という意味のことを言っているのは、これを指したものでしょう。

生命が通っている知性は、いつも未知を前にして、自分の能力を疑いながら進んでいくほかはなく、不安で謙遜なものです。

ところが、現代のようにそれぞれの分野における知識の量が非常に増加して、既成の知識を——細かく専門に限って——習得するだけでも莫大な努力と時間を要するようになる、それだけが学問であるような錯覚が一般に広がってきます。知性が生きた判断力を失って、既成の知識を理解し、記憶するだけに止まられ、それで自分の使命が果たされたように思ってしまうのです。この程度で満足する知性の特色は、いつも自分の能力を過信して傲慢なことです。

我が国では学問と言えば、どうも単なる知識の集積というふうにかたがちです。こういう弊は無論どの国でもあり、怪しげなインテリほどインテリ面をするのは、人間の通性かもしれませんが、我が国ではこの傾きが特に強いようです。

これは現代だけのことでなく、昔からそうだったやうで、学究を奨めるのに、「博覧強記」という言葉を使います。書物を博く読んでそれをよく覚えていくという意味ですが、それなら書物の題名であって、学究どころか人間とも言えないはずだ。

11 「その目的」の内面に注意する。アンテナ

12 英集—知覚にまつての意識の中に現れる。

13 華田實彦(1910年)

14 昭和十二年、物見学、博士、東京大学の生まれ。

15 類化する。同一視する。究

16 厄、共虐

17 インテリジェンスの「インテリ」ラテン語 (intelligence) 参る。

しかし、我が國が明治以來百年たらずの間に、西洋の文明を、異質な文化伝統を持った國々に類例のない速度で移入してしまつたのは、主としてこの習性のおかげでしょう。

我が國の文化史は、大體外國文化の影響史と云つてよいくらいで、殊に広い意味での文學の領域では、奈良朝以前から漢學が教養の中心であり、この習慣は江戸末期まで変わら

ませんでした。明治維新になつて西洋文明の輸入が國家的課題になつたとき、それを現実に

に負つたのは、武士階級とその子弟たちですが、彼らの精神はこの課題に答えるに與に好都合に準備されていたのです。神佛の信仰の混合、あるいは均衡のもたらした一種の無

神論、あるいは合理主義が、西洋の功利思想を受け入れるに最適な地盤であつたといふよ

うな根本の事情はともかくとして、單に技術的な面だけを考へても、永年外國の文學に、

返り点を打つて読む習慣を養つてきたことが、語彙が全く日本語と違ふ英語などを讀む

(理解する) 上で非常に役立つことは確かです。

幾万の漢字を無理に覚えで覚える「字問」が象徴したような既成の知識の堆積を、人間が

實際に感じ考へたこと以上に権威を享へる風習は、西洋文明の輸入によつてかえつて悪化

したと考へられるのです。

ほくらの祖先が唐やインドの文化の影響を受けたのは、彼らの肉体的要求に基づいたの

であり、武力による脅威など長い歴史を通じて教へるほどしか受けなかつたのですが、明

治以後の西洋文明移入の事情はこれと全く違ふのです。黒船という言葉が象徴するように、

この文明はまず武力と経済力として迫つてきたのです。日本がインドか中国のような運命

☆「この習性」の
内容に於ける。

9 神佛合一の習性、
10 神佛合一の習性、
11 立脚、
12 立脚、
13 立脚、
14 立脚、
15 立脚、
16 立脚、
17 立脚、
18 立脚、
19 立脚、
20 立脚、
21 立脚、
22 立脚、
23 立脚、
24 立脚、
25 立脚、
26 立脚、
27 立脚、
28 立脚、
29 立脚、
30 立脚、
31 立脚、
32 立脚、
33 立脚、
34 立脚、
35 立脚、
36 立脚、
37 立脚、
38 立脚、
39 立脚、
40 立脚、
41 立脚、
42 立脚、
43 立脚、
44 立脚、
45 立脚、
46 立脚、
47 立脚、
48 立脚、
49 立脚、
50 立脚、
51 立脚、
52 立脚、
53 立脚、
54 立脚、
55 立脚、
56 立脚、
57 立脚、
58 立脚、
59 立脚、
60 立脚、
61 立脚、
62 立脚、
63 立脚、
64 立脚、
65 立脚、
66 立脚、
67 立脚、
68 立脚、
69 立脚、
70 立脚、
71 立脚、
72 立脚、
73 立脚、
74 立脚、
75 立脚、
76 立脚、
77 立脚、
78 立脚、
79 立脚、
80 立脚、
81 立脚、
82 立脚、
83 立脚、
84 立脚、
85 立脚、
86 立脚、
87 立脚、
88 立脚、
89 立脚、
90 立脚、
91 立脚、
92 立脚、
93 立脚、
94 立脚、
95 立脚、
96 立脚、
97 立脚、
98 立脚、
99 立脚、
100 立脚、

明治文化は武士の氣質に西洋の教養を接ぎ木した人々によつて築かれたとは、よく言わ

れることですが、この不思議な混交の特性がどこにあるか、はつきり考へた人はあまりな

いようです。

如座に閉じて書けば、その特質はまず既成の知識の取集、堆積をもつて、知性の生きた

働きに換へた点にありましよう。英文と英語(あるいは独・仏語)とは、その点で不思議

な連帯をなしたのです。ヨーロッパでも中世には、人々はラテン語で書き、ラテン語で考へ

たと書かれていました。近代はこれらの生活から離れて固定化した概念に、個性の体積を通

じて生命を回復したところに成立したので、ラテン語を俗語に換へる広い意味での言文一

致運動がその背景をなしたのです。だれにも分かる言葉で易しく書くことは、單に字問の

普及を圖るためではなく、死語の中いわけ水漬けになつていた觀念に生命を吹き込むた

めに必要だつたのです。

ところが我が國では、西洋語の抽象名詞は皆、漢語の訳語を当てはめてしまつたので、

翻訳が外國語で書かれた思想なり文學なりを自國の言葉に移すことだとすれば、この水漬

けの言葉の別で水漬けにしたにすぎない。翻訳は、その本来の使命の半分しか達してい

なかつたことになりましよう。しかし問題はこゝろに誤すことが、外國語による新しい

☆「知性の生きた
働き」の内容に
於ける。

15 俗語(日常の語
七)を採る、
16 採る、
17 採る、
18 採る、
19 採る、
20 採る、
21 採る、
22 採る、
23 採る、
24 採る、
25 採る、
26 採る、
27 採る、
28 採る、
29 採る、
30 採る、
31 採る、
32 採る、
33 採る、
34 採る、
35 採る、
36 採る、
37 採る、
38 採る、
39 採る、
40 採る、
41 採る、
42 採る、
43 採る、
44 採る、
45 採る、
46 採る、
47 採る、
48 採る、
49 採る、
50 採る、
51 採る、
52 採る、
53 採る、
54 採る、
55 採る、
56 採る、
57 採る、
58 採る、
59 採る、
60 採る、
61 採る、
62 採る、
63 採る、
64 採る、
65 採る、
66 採る、
67 採る、
68 採る、
69 採る、
70 採る、
71 採る、
72 採る、
73 採る、
74 採る、
75 採る、
76 採る、
77 採る、
78 採る、
79 採る、
80 採る、
81 採る、
82 採る、
83 採る、
84 採る、
85 採る、
86 採る、
87 採る、
88 採る、
89 採る、
90 採る、
91 採る、
92 採る、
93 採る、
94 採る、
95 採る、
96 採る、
97 採る、
98 採る、
99 採る、
100 採る、

☆「知性の……外
面性」の内容に
於ける。

15 俗語(日常の語
七)を採る、
16 採る、
17 採る、
18 採る、
19 採る、
20 採る、
21 採る、
22 採る、
23 採る、
24 採る、
25 採る、
26 採る、
27 採る、
28 採る、
29 採る、
30 採る、
31 採る、
32 採る、
33 採る、
34 採る、
35 採る、
36 採る、
37 採る、
38 採る、
39 採る、
40 採る、
41 採る、
42 採る、
43 採る、
44 採る、
45 採る、
46 採る、
47 採る、
48 採る、
49 採る、
50 採る、
51 採る、
52 採る、
53 採る、
54 採る、
55 採る、
56 採る、
57 採る、
58 採る、
59 採る、
60 採る、
61 採る、
62 採る、
63 採る、
64 採る、
65 採る、
66 採る、
67 採る、
68 採る、
69 採る、
70 採る、
71 採る、
72 採る、
73 採る、
74 採る、
75 採る、
76 採る、
77 採る、
78 採る、
79 採る、
80 採る、
81 採る、
82 採る、
83 採る、
84 採る、
85 採る、
86 採る、
87 採る、
88 採る、
89 採る、
90 採る、
91 採る、
92 採る、
93 採る、
94 採る、
95 採る、
96 採る、
97 採る、
98 採る、
99 採る、
100 採る、

いかげんに貞享元年を離れたいのだが、ここにもう一件、どうしても避けて通れない、日本の文化史上の画期的な事件がある。天文学者の保井春海(のち清海)による、この年十月の改暦である。

日本の暦は、月(太極)の満ち欠けと太陽の運行を合わせ考えた中国の太陰太陽暦を、持統天皇四年(六九〇)に採用して以来、この貞享改暦の直前まで、ほぼ一千年ほど中国一辺倒であった。もちろん中国ではたびたび改暦しているのに、日本でもそのつと舶来の新暦を採用していたのだが、貞観四年(八六二)という平安前期に、唐の徐坦が撰した「宣明暦」を採用した頃から、唐末の戦乱のために、菅原道真の建議によって、それまで二世紀半も続いていた遣唐使の制度が廃止されたので、その後の新暦を手に入れることができなくなってしまった。おまけに日本の朝廷には、暦法に精通した陰陽博士がいなかったため、暦を改めることも行われず、ことし貞享元年の改暦まで、実に八百年あまりも同じ「宣明暦」を使用してきたのであった。

ところが江戸時代になると、南蛮流の天文学がはいつてきたりして、古い「宣明暦」が天象と大差のあることに気付く学者が、ぼつぼつ現れてきた。しかし何分にも吉利支丹禁制の御治世で、寛永六年(一六二九)には踏み絵の制が、翌年には洋書の禁が施行されていたので、新知識をおくびにも出せないあり様であった。

たとえば正保三年(一六四六)には、南蛮流の天文学を学んでいた長崎の林吉佐衛門が、吉利支丹の嫌疑で投獄されて獄中で死に、その門人の小林養信も投獄されている。マルクスの資本論が本箱にあったというだけでパクられた、戦前の昭和時代と似たりよったりの時代であった。

しかし新知識への若い学究の熱意は、それが邪悪なものでないかぎり、いかなる権力もこれを滅ぼすことはできない。また吉利支丹奉行の設置などによる徹底的弾圧政策によって、さしもの信徒も一応形をひそめたので、吉利支丹アレルギイが後退したせいもあって、ぼつぼつ古暦に対する疑問が表面化しはじめた。

はじめ数学者で、江戸の芝西応寺門前で塾を開き、数学を教えていた池田昌意は、かねて「宣明暦」が天象と大差のあることを嘆き、暦法を勉強していたが、十四世紀のころに成立した元の「授時暦」を寛文十二年(一六七二)に入手して検討した結果、「宣明暦」の暦日を正すことができた。ところが、当時は暦を批判することが禁じられていたので、歎名の門人に教えただけだったという。「授時」とは、暦は元來、農民に四時八節などの時を教えるものであるゆえの名である。またその翌延宝元年には、小川正意も「新勘授時暦」を著して、朝廷発行の「宣明暦」と天象との間に四十七時間の誤差のあることを指摘したが、無視されてしまった。その仲間の一人で、閑閑な公家の権威に科学的

なデータをたずさえて立ち向かった保井春海は、幕府の幕所の保井算哲の子であった。

春海もまた、小川正意が「新勘授時暦」を発表した延宝元年に、はじめて改暦の必要を朝廷に上奏したのであるが、これまた相手にされなかった。何しろ当時の天文方は朝廷にぞくし、暦は平安中期の陰陽家・安倍晴明の子孫である土御門家が編成し、加茂家(のち徳井家)が中下段の吉凶を注し、奏進のち下げ渡すというのが長いしきたりであった。

その永年の権威を、幕所の小作ごときに冒されてなるものか、というのが本音であったろう。ところがその翌々延宝三年五月一日に日蝕があったが、それが暦と一致しなかったため、それから春海は机上の空論を打ち切り、改めて天体観測に従事するうちに、またもや暦に注記されていた天和三年(一六八三)十一月一日の日蝕がなかったため、阿月ふたたび春海は改暦の件を上奏したのであった。

そうなるも朝廷でも煩かぶりですますわけにいかず、当時の陰陽家の土御門泰福と春海を討論せしめたのであった。ところが春海の提言を無視して、翌貞享元年四月、木下綱後人どもが十四世紀末に成った明の「大統暦」を採用してしまった。春海はあきらめる所をあきらめず、三度目の正直とばかりに、ただちに改暦を上奏した結果、彼が「授時暦」にもとづき、災禍による京都の子午線(球面天文学上もっとも重要な標準の基準)を基準として作った、最初のメード・イン・ジャパンの新暦が同年十月に採用され、勅命によって「貞享暦」と称することになった。多少の誤差はあるにしても、これはまさに偉大な功績である。だから貞享暦頒布以後の暦作りの実権は、同年十二月一日付で、保井春海を天文方とした幕府の手に移り、朝廷所屬の陰陽師の土御門家と暦博士の幸徳井家は、幕府の天文方で作製した暦に、さまざまの暦注を記入するのみの存在となってしまった。その上、翌々貞享三年には、暦博士が春海について暦学をまなぶにいたっている。まことに輝かしい科学の勝利であった。

春海はなお天体観測をはげみ、元禄十五年(一七〇二)には天体地経を脱いた当時最良の天文書「天文取統」を著し、またそれまで三百座千四百六十五星であった星座を、三百六十一座千七百七十三星となすにいたっている。

江戸時代の天文学は春海いらい盛んとなり、特に八代將軍吉宗はこれを庇護し、享保三年(一七一八)には天体の位置と経緯度を観測する球形の天球儀である渾天儀を作らせて吹上御苑中に設置し、延享元年(一七四四)には神田佐久間町に天文台を建て、吉宗自製の渾天儀(渾天儀を簡略化したもの)をそなえさせた事は有名である。なお「貞享暦」は、その後六十九年間行われ、宝暦四年(一七五四)にいたって、「貞享暦」をいささか改めた「宝暦暦」を採用し、その後また「寛政暦」「天保暦」と改訂されたが、明治五年(一八七二)にいたって、従来の太陰暦法(旧暦)を廃して、太陽暦(新暦)を採用したのである。(参考:「江戸時代の科学」他)

一月並当日御祝義ニ付朝五半時過同役方出案内夫方出宅二条
へ出仕服紗小袖麻上下

一例之通大書院へ若狹守殿御出坐当日御祝義定例之通申上候
一若狹守殿御逢有之候事

一昼九時過退散夫方妙満寺間部下総守殿御旅館へ罷越用人ヲ
以当日御祝義申上候別段御逢無之候事

一夕八時帰宅
一当日ニ付

御社へ參詣仕候事

一今朝当日祝義組与力并町人共定例之通受申候事

一三井元之助閑東へ罷越候付別段目通申付候三井次郎右衛門
掃京礼申出候事

一紅屋年寄代り礼有之候金貳百疋上納有之候

一組同心吉竹彦蔵組入之礼扇子箱献上有之候事

一内藤豊後守殿方納戸使直書ヲ以今日寺町旅亭御普請出来返
引渡相濟候付袴地老反交着折三ッ来ル返事遣候事

一組与力同心今朝夫々役替申付候小書院ニテ申渡候事田中寛

次郎公事方〔中伏〕西尾端之助数方差免欠所方申付候塩津惣五
郎数方申付候加納武吉郎組並申付上田鉄之助土砂留掛り申
付候高屋助蔵目付〔中伏〕之事其外同心共エハ同心支配
方申付候事

二日 曇

一御用日例之通り訟〔中伏〕三ッ有之候右ニ付例之通立会断申候事
一内藤豊後守殿今日寺町旅亭へ引移りニ付為歎以使者鮮鯛一
折并肩衣老反遣候事

一高階丹後介方餞別菓子入瀬戸もの手塩十枚其外〔中伏〕菓子来
ル其外奥向へ〔中伏〕羽重米沢糸織彦四郎へ子供へ服紗来ル

三日 晴

一昼四時出宅今度

御所御取締被 仰付候ニ付參
内着用服紗小袖麻上下也

一例之通執次ヲ以同

御機嫌且御取締掛之御礼申上候尤兩役衆へも吹聴執次ヲ以
申入候取次南大路遠江守也

一勘使所御賄所清問其外見廻申候事御附御賄頭一同相廻候事

一時刻ニ付御認戴申候事

一昼九半時退出夫方

准后御殿へ參殿同断申上候夫方〔中伏〕御賄所其外見廻候事

一九半時過退出夫方久我右大將殿徳大寺大納言殿大久保大隅
守中山大納言殿坊城中納言殿〔中伏〕里小路前大納言殿広橋前大
納言殿御取締掛吹聴申上候尤玄関ニテ申述候夫方大久保伊
勢守内藤豊後守ニも吹聴申述候ニ付罷越候豊後守ニハ引移
之歎も申述候事

一夕七時前帰宅

一掃宅後白洲致候例之通取立一口并家〔中伏〕遣候口三口有
之候事

一同役長門二条妙満寺へ今日出候事

一内藤豊後守殿方直書御取締掛〔中伏〕歎 鱧一本甘鯛二ッ
小さこし式ッ来ル返事遣候事

一今日議 奏衆之内裏松大蔵卿殿罷越〔中伏〕延引致候事

四日 晴

一例刻二条へ出仕平服也

一昼九時過帰宅
一内藤豊後守殿へ直書并調書別紙遣候事
一高階丹後介義二条殿供ニテ近々出立ニ付饗別線仙台平袴地
二反着海老五ッ遣候備前介へ品物一箱〔中伏〕入〔中伏〕遣候其外
奥向方も品物遣候事

五日 初子 晴

一御用日例之通訴訟五通有之候

一例之通立会断申候事

一早川庄次郎佐藤清五郎へ直書重詰看遣候之事

一今日岸和田方岸田善右衛門掃京致候事

一三井二人方交着一折献上有之候事

一二条方御達并石谷因幡守松平久之丞方書状右ハ当地之吟味
致候小林初夫々江戸表へ引〔中伏〕申来候其外廉書之分取調
申遣候様申来候〔中伏〕同役方廻し来ル尤明日立会吟味致候段も
申来候之事

一江戸表へ定便差出候其節岡部因幡守殿〔中伏〕直書返事遣候其節
歌仙菓子かすて〔中伏〕式朱二棹入袴箱遣之候事

一初子例之通祭申候事

殿方直書此間クミ袋遣候挨拶帯地来ル
一江戸表方去ル十二日出之十日限来ル其節岡部因幡守殿方直書海苔七帖来ル

高屋助蔵
田村清八
吉竹徳蔵
森義左衛門

廿四日 曇 朝雷雨

右之通申渡候事

一今日間部下総守殿御上京後初テ御参
一内酒井若狭守殿御同道有之候事
一御贈位御礼之

一右之趣ハ昨日呼出今日麻上下ニテ一同罷出候事
一明日訴訟ハ
一將軍 宣下 陣ニ付訴訟流ニ相成候旨申来候事

御使由良信濃守殿モ今日参

廿五日 曇 夜ニ入雨

内有之候即日御暇被 仰出候事

一今日御用日

一右ニ付二条へ御用伺朝五時御出門ニ付別段罷出不申候事
一今日

一將軍 宣下 陣ニ付訴訟共無之候事

一満宮御下向ニ付組与刀同心御用掛り右御下向之節召連候段
一相達候事尤小書院ニテ申渡之

一昨日間部下総守殿参

与力

一内ニ付右為歡先例之通朝五半時過出宅罷越候

木村勘助

一着用平服也

塩津惣五郎

一用人ヲ以右御款申上候事

同心

一右相濟夫方帰り掛二条へ出仕無急度昨日之御款且御見廻申上候事

山下郡助

上候事

一夕八時前掃宅

一北野代参彦四郎罷越候事十万八も参り候事

一松平遠江守殿方時候鮮鯛一折来ル

一岡部下総守殿方為土産紗綾二巻以使者差越候明日御礼罷出候事

一昼九時退散夫方妙満寺御旅館へ罷越候昨日御土産物紗綾二巻拜受之御礼用人ヲ以申上候事

一夕八時掃宅

一江戸表方去ル十九日出之六日限来右へ寛承三十八日附添人とも着夫方石谷因幡守へ差出候処一通り尋之上牢屋敷預ケ申渡候由申来候事

一浪人池田^(たに)大学今日長門御役所へ昨夜掃京致候旨町年寄方召連相届候由右ハ此方御役所ニテ探索致候ニ付取調申来候右

一右ニ付御届之義今日ハ御祝義ニ付明廿六日到着之積リニテ明日御届二条へ差出候積リ之事

一江戸表へ右一条ニ付江戸表御届其外之義六日限差出候事

一大般若例月之通執行致候事

一品川へ一昨日之返事遣候其節松平河内守へ返書遣候移り土ひん染付袴ツ遣候尤由良信の守殿へ頼遣候事

一右御届下総守殿若狭守殿へ差出候事

一日光新宮今日

親王 宣下 御式有之候事

一昨日江戶表方申来候寛承三義之義御届今夕酒井若狭守殿へ以使者差上候処御落手之旨岸本省吾申聞候由尤差控之義も為念例書遣申上候処伺候□及不申候旨同人申聞候之事

但妙満寺ニテも奥御祐筆御仕置掛り早川庄次郎エも承合候処揚屋入ニテも差控伺候ニ不及候旨申聞候事

廿六日 曇

一昨日

一例刻二条ニ出仕平服也

一將軍 宣下 御式陣之事無滞被為濟候之段御附方申来候事

津田左右吉

諸生規矩階級二冊。読書路徑一冊。これはわたくしが子どもの時に写しておいた本である。明治十九年に写したと書きそえてあるから、考えてみると、小学校を卒業した十四の時のことらしい。こういうものを写したことから、殆ど忘れていたが、六、七年まえに、むかし読んだ四冊や五冊の素読本のつみかさねてある中から、ふと見つけたので、何となしに手近かなところへもって来ておいた。版にはなっていないはずであり、あまり世間に知られていないものでもなからうと思うから、この二冊の本のことを少しばかり書いてみることにする。

二冊とも、著者は三宅尚斎の門人の壁(布地)養斎である。崎門のならわしとして、教をうけた師の著述や講義の筆記を、弟子から弟子へ、次第に写し伝えることになっていたので、この二冊もそのようにして伝わって来たものであろう。わたくしは郷里の美濃で、小学校にあがった時から卒業するまで、ずっと引きつづいて教をうけた森先生という先生から、その先生の若い時に写された本を拝借して、というよりも写すように命ぜられて、写したのである。先生は名古屋の人で、幕末時代から明治の初年にかけて尾張の藩学の明倫堂の督学であった細野要斎の門人であったから、先生がこの本は要斎の本から写されたものに違いない。明倫堂は延享寛延のころであったかと思うが、その時分に名古屋にいた養斎の建議によって建てられた学校であって、養斎はいわばこの学校の最初の督学であった。後には学風の違った細井平洲や家田大峰が督学となったこともあるが、養斎によって名古屋に崎門の学が植えつけられ、その学統が幕末まで続いていたのではなからうか、と思ふ。この辺の事情はわかつていゝるであらうが、わたくしはよく知らぬ。ただ要斎が藩士出身の儒官として崎門の学をうけついでいたこと、そうして養斎の著書に写し伝えられていたことを考えると、こう推測しても、大い、まぢがいはあるまい。しかし幕末ごろの名古屋においては、崎門の学といっても、この学風の偏固な風潮がそれに伴っていたように見える。これは主として森先生からうけた印象によつていゝるのであるが、名古屋人の氣質、または名古屋の知識人を包んでいた一種の文化的雰囲気からも、そう感ぜられる。名古屋人は崎門の偏固な風潮を緩和させたのであるまいか。或はまた名古屋に限らず、時代のたつに従つて一般にそういう傾向が此の学派の一面には生じて来たのかも知れぬ。なお或は尚斎の学統に属するものの特長の傾向がそこに現われているのであろう。ただし学問としては開斎の説がそのまま奉ぜられていたことは、いゝまでもない。

諸生規矩階級といふのは、養斎が入門の学生の心得と学級の規程とを書いたものであつて、諸生規矩と諸生階級との二部に分れている。あとがきによると、享保のころに書いたものを寛延元年に訂正したことになつてゐるが、本文の終には元文元年と記してある。規矩の方は、最初に「学問伝授ノ方、流義學風、世に品々在之候、手前ハ道学ヲ相伝申候、道学トハ、近クハ我身我家ノトリマハシ、遠クハ天下ノサバキ方ヲ教候間、先々此所ヨク御心得ナサルベク候、道学ハ朱学ニテ候、其内、手前ハ三宅尚斎先生ノ弟子ニテ候、尚斎先生ハ山崎闇斎先生ノ御門ニテ候」といひ、まづこうから学派の名のりをあげてゐるのは、崎門の学者の態度をよく現わしてゐるものといえよう。本文で興味のあるところの一、二をひろつてみると「講釈の間方」といふ条に、講釈をきく前にまづ下見をして、それぞれの章節につき、大意、本意、訓詁、義理、疑難、功用の六つを考えておき、

いよいよ講釈をきく時には、「今説カル、ハ大意ゾ、本意ゾ、訓詁ゾ、義理ゾ、疑難ゾ、功用ゾ、ト分ケテ吞込ミ、下見ノ時スマヌ所、殊更氣ヲ付テ御座可有候」さて講釈が終つて宿所へ帰つたら、また此の六つについて篤と「かへりみ」をせよ、と説いてある。六つの項目には書物の理會のしかた又は講釈のしかたが示されているようであるが、それは養斎の創意か、または尚斎もしくは開斎から伝えられて来たことか、今わたくしにはわかりかねる。また聞き書き(筆記)のしかたについて、講釈の席では書かす宿所へ帰つての「かへりみ」の上で書くのが極上だと説いてある。ただ「おぼえ」のわるいものは下見の時に疑問とした点を目録にして講釈の席に持参し、それに書き入れるだけのこととはしてよい、となかなか細かな注意を与えている。「講釈間取様(御ノ云フメトト覺エルコトニハ無之候)」といつてゐるが、これは其のころの学生の弊習を指摘したものであろう。それから会読のしかたをも教えているが、ここには省いておく。

次に階級の方は、学生を新学、新学上座、久学、久学上座、の四級に分け、講釈をきく書物と会読をしたり独りで読んだりすべき書物とを、それぞれにわりあてたものである。講釈をきくのは学問の根幹となる主要な書物であるが、新学では小学及び家礼、新学上座では近思錄及び順々に傍聴するものとして四書五經、久学及び久学上座では四書注、といふことになつてゐて、朱学の面目がそこに見える。会読の書のうちには、久学で、國史、十八史略を、独りで読む書として久学上座に、程子朱子の全書、本朝の政書、律令格式、六國史、並に史記、漢書、通鑑綱目、などを挙げた。本朝の書をかういふように撰限したもの、また養斎だけの考か、尚斎もしくは開斎からうけつがれたところのあるものか、わたくしには今はつきりわからぬ。中世以後のもの取られていないことも目につくので、それには理由として考えられることもあるが、今はそこまで立ち入らぬことにする。

読書路徑には元文元年に附かれた序文がある。多分、その年にでき上つた著作であらう。小学、家礼、近思錄、四書、六經、及びそれらの一々についての注釈書や参考書の解題と読みかたを記したものであり、本朝の書としては律令格式、旧事紀、古事記、及び六國史、支那の史書として二十一史、通鑑、皇明通紀、並に漢以後の政典についても、簡単な説明がしてある。しかし単なる解題ではなくして、門下の学生に学問のしかたを教えるのが目的であるから、それについての養斎の特殊の見解がところどころに見えてゐる。そのうちに、学問は小学から入るべきもので、学問の究極を説いた大学からとりかかるのは大まぢがいだ、といつてゐるところがあるが、その大学を「ヲトナデカラガ、町、在ノモノ、志ナキモノナドハ、一生知ラデモヨキ書」と評してゐるのは、おもしろい。家礼について「コレヲノ作法、今日デハ段々時代モチガヒ固モチガフテリ、亦我身上カツテニ段々アルコトナレバ、ソツクリト、コノ通りニハナラヌコトモアレドモ、コノ書ヲ吟味シテツケバ、コノ中カラ一分相應ノトリマワシガデテクルゾ」といひつゝゐるのも、興味がある。これらの点についても、また上に述べた諸生階級に記してある書物の撰採などについても、崎門の学者の、或はもう少し広く見て我が國の朱子学者の、或はまたもっと広く見て徳川時代の儒者の、それらのことに現われてゐる時代による思想の変化、または学派もしくは学統による考えかたの違いを、しらべることができれば、しらべてみたいと思つてゐる。

此の二冊は他に類例が無いといふやうなものではなく、特に読書路徑に似たような性質のものはいろいろあるが、享保元文ごろの崎門の一派の学問のしかたを知る一つの材料にはなるらう。

2 坂本龍馬の和歌の意味

私は右の回答文で龍馬本人の「古今調」の作を引用する余裕がなかったため、実例によって「和歌」の和歌たるゆえんを説明することができませんでした。そこで今、彼の和歌数首を引用し、若干の注釈をそれに加えてみようと思います。あらかじめのべておけば、この幕末の志士の現存する和歌はせいぜい二十首前後で、それらは宮地佐一郎氏の多年丹精の労作「坂本龍馬全集」(光風社書店)に入っています。

桂小五郎揮毫を流めける時示すとて

ゆく春も心やすげに見ゆるかな花なき里の夕暮の空

恋

きまやらぬ思ひのさらにうち川の川瀬にすだく螢のみかは

淡川にて

月と日のむかしをしのぶみなと川流れて清き菊の下木

明石にて

うき事を独明しの旅枕磯うつ浪もあはれとぞ聞

「ゆく春も」の歌は、「花なき里」の晩春のおだやかな夕暮を詠んでいます。ただそれだけの内容ですが、この歌を詠んだ龍馬の頭には、おそらく「古今集」の次の二首があったはずで、その一は在原業平の「なきさの院にて桜を見てよめる」と詞書のある歌、「世の中になえて桜のなかりせば春の心はのどけからまし」。その二は紀友房の「さくらの花のちるをよめる」とある歌、「久方のひかりのどけき春の日にしづこころなく花のちるらむ」。

どちらも古來人口に膾炙した「古今集」の代表的名歌です。いずれも桜の花の咲き、また散るさまを見ながら人が感じるさまざまなあわただしい思いを言いつつ、逆説的に桜の花を詠んでいます。龍馬はそれらを下敷きにして、晩春、桜も散りはてた花なき里の穏やかさ、やすらかさを、「これもまたいいではないか、小五郎よ」と言っているのです。

「きまやらぬ」の歌は、「思ひ」の「ひ」の中に「火」を詠みとろうとする古典和歌の常套手段を、革命家龍馬もごくあたり前の手法として踏襲していることを示す歌です。「うち川」は「夏」を中に隠しつつ、「宇治川」の螢を呼び出していますが、この「螢」は、お尻に「火」を明滅させつつ飛ぶゆえに、古來恋人たちの「思ひ」の「火」の代弁者に仕立てられてきた虫でした。龍馬は「恋」という題を与えられて、題詠の定石通り、そういう古典的で陳腐な語彙を忠実に踏んだ一首をものしているのです。

「月と日の」の歌は淡川で作られています。淡川はいうまでもなく龍馬にとって尊敬すべき先人、楠木正成・正行父子の故地です。その地で詠む懐古の歌には、当然楠木一族への敬慕の念が籠められねばなりません。この歌はそれを十分に果たしています。すなわち「流れて清き菊の下木」。周知のように、楠木の家紋は、一輪の菊の花が流水に半ば身を沈めつつ川の流れに浮かんでゆく図柄でした。「うき亦を」の歌は、「明石」の地名と夜通し眠れず夜「明かし」してしまった旅返の仮枕の愁いとを結びつける掛けことばの技巧を中心として詠まれています。

坂本龍馬という「勤王の志士」が、文化伝統の受容と継承の仕方においてまさに「勤王」だったこと、少なくとも勅撰集伝統のまことに素直な踏襲者であったことは、わずか数首の遺作を読むだけでも明らかでしょう。注意すべきことは、龍馬の歌がほとんどすべて、座敷か旅先での即時かであり、短冊のようなものにいきなり書かれたものだったということです。机上で推敲するひまなど彼にはなかったし、そんなことまでして歌を詠むような人ではありませんでした。つまりふだんの教養そのま

まがここには出ていると見ていい。
はたちを過ぎて日も浅い土佐の剣術使いにしては仲々のものじやないか、などと冷やかしてすまずわけにもゆかないほどの古典和歌の嗜みがこの人物にはありました。そういう基礎教育を彼に与えたのは、おそらく彼の姉乙女を中心とする家の伝統だったと思われませんが、こんな具合に「古今集」伝統を実践的に身につけていた若者であれば、京で公卿貴族たちと面談しても、イナカモノの気後れをいなく理由はなかったと思われまます。同時代の公卿貴族で、龍馬の和歌程度の歌でも即時できた人は、たぶんごく少なかっただろうからです。

日本が始めてこの所謂君民同治の政治を創立するに際して、当時の有識者の中には、なほ時期未
 件の熟せりや否やに就いて、若干の危惧を抱く者があつて、専ら西洋の諸國を歴訪して、彼等の経
 験を学び知らうとした。我々の先例踏襲は國柄でもあつたが、是に外國の模倣を加味したのは、此
 時が始めと言つてよからう。西洋の経験には個性があり、従つて予測は区々であり、又悲惨なる失
 敗もくり返された。独り其中に在つて、スタインといふ奧太利の老國法学者のみは、深い同情を以
 て日本の立場を理解し、こちらの側に立つて、当面の問題を考へてくれたと言はれる。其意見とい
 ふのは世に伝はり、且つ深い感服を以て遵奉せられて居た。第一の要旨は民を新たにする為、先
 つ教育の制度を立て直して、立憲の政治にふさはしい國民を作るべきだといふに在つた。勿論今と
 ても是は至当の説であり、日本の老人が之を金科玉条として、始末文部省の行政に対し、特殊に眼
 を光らせたのも尤もではあつたが、美止なことには其眼は末梢に走りやすく、幾つかの要旨を見落
 して来た嫌ひがあつた。たとへば今回の占領七年間に、始めて改定を命ぜられた二三の項目の如き
 は、すでに推折の初頭から確定し、実ば政治的の悪用曲解も若干はあつたのだけれども、それさへ
 心づかずに元のまゝとして、守りつけて来たものであつた。歴史は國語に次ぐ重要な科目として、
 寸時もたゆまずに七十余年、教へに教へて今日に至つたものだけれども、なほ其二つの中には改革
 の必然にして、否む能はざるものがあつた。國語の教育に関しては、何れもすでに論議したから、
 妾ではそれをくり返さない。たゞ一言するならば、少数の字を廢る者が採用し、又は時として新作
 した単語を、婦人小児を含む最大多数が、解釈し暗記し又時として使はねばすまぬといふのは、民
 主的といふ思想からは最も遠く、しかもそれが漢字制限の今日まで、平氣でなほ使つて居るのも学
 校の痼疾であつた。歴史の教育の効果に至つては、又是よりも一段と悲惨である。と言つて悪けれ
 ば虚無に近い。試みに歴史は一通り学んだなどと稱言する者に向つて、何が一生の間に役に立つた
 かと尋ねて見れば、其答へは恐らくツアの一言であらう。

日本では何の目的も無しに名や年月日をおぼえ、会話に相協が打てるのまでを修養と名づけて居
 るが、ちつとも使はぬ為になんか多くは忘却して居る。親子の間にもそんな言葉は出る折が無
 く、さかしい白紙のやうな幼童たちが、昔はたゞ石器と土器を作つた世の中のこと、心得て、学校
 へ入つて行くのを見て居ると、何といふことも無しに涙がこぼれる。

104

103

白藤摩の浴衣の上に、藍襦袢のお召の袴、黒絹子に八反の腹合せの帯を、しどけなく締め、
 白縮緬の湯具踏しだきて、降しきる雨に傘をも指さず、鮮血のしたたる出刃包丁を提げたる
 一人の美人が、大川端に、この頃開きし酔月の門の所をドンドン叩き、オイ爺ンや、早く明
 てと呼ぶ声は、常と変わりし娘の声と、老人の専之助は驚きながら、顔屋外せば、ズット入る
 娘のお胸、其場に右の出刃包丁を投り出して、私しゃア今、前屋の窓を突殺したよ、人を
 しゃ殺ア助からねえ、これから屯置へ自首するから、跡は宜い様に頼むよ、と言ひ棄てて飛
 出したるは、これなん此家の主婦、以前は柳橋で秀吉と言ひ、後日新橋で小秀と改め、其後
 今の地に引移りて待合を開業せし、本名花井お胸(二十四)なり。(後略)

『東京日日新聞』

殺害、日本橋区真町三丁目三番地、大川端の待合酔月の主婦花井お胸(二十四)は、昨夜
 九時頃同家の門前なる上様の側で、同人が秀吉と名乗り、新橋に勤めし頃の箱屋にて、
 今も同人方へ雇ひ居る八杉峯吉(三十四才)を出刃包丁にて殺害し、久松警察署に自首したり、
 しかし同人が警察署にて自首せし処に聞れば、右峯吉は予てむめに懸想し居りしが、同夜む
 めが外出の折を復ひ、出刃包丁を以つて強迫に及びしにより、むめは是を奪ひ取つて峯吉を
 殺害したる旨申立てたと云う。峯吉の死体を検視せしに胸先より背を突き抜かれ、且つ面部
 手足にも数カ所の傷手を負ひ居れり。

『朝日新聞』

日本の歴史家という題でこの一文を書きお約束をしたときの意図は、大体人物を中心とする明治以前の歴史家という編輯者のお話に沿おうとするものであったが、実際に書いて見ると結局このような形のものになってしまった。その点或は最初のお約束とはかけ離れたものになってしまったと思われるが、しかし強いていえばこうした形をとらなければならなくなった点に、我々はもつと突込んで日本歴史そのものの特性を考えて見なければならぬことがあるとも考えられるままに、散えてこのままの形で提出することにした。なお明治以後の歴史学の発達及び歴史家についての問題は最初から私の範圍外であるが、ただ論旨について真実に近代歴史学の基礎を築きあげようとした田口鼎軒についての森岡外の批評を左に掲げてこの一文の結びとすることを許されたいと思う。

「(上略) 私は日本の近世の学者を一本足の学者と二本足の学者とに分ける。

「新しい日本は東洋の文化と西洋の文化とが落ち合つて渦を巻いてゐる国である。そこで東洋の文化に立脚してゐる学者もある。西洋の文化に立脚してゐる学者もある。どちらも一本足で立つてゐる。一本足で立つてゐても、深く根を卸した大木のやうにその足に十分力が入つてゐて、推されても倒れないやうな人もある。さう云ふ人も、國學者や漢學者のやうな東洋學者であらうが、西洋學者であらうが、有用の材であるには相違ない。

「併しさう云ふ一本足の學者の意見は偏頗である。偏頗であるから、之を實際に施すとすると差支を生ずる。東洋學者に従へば保守になり過ぎる。西洋學者に従へば急激になる。現にある許多の學問上の葛藤や衝突は此二要素が争つてゐるのである。

「そこで時代は別に二本足の學者を要求する。東西兩洋の文化を、一本づつの足で踏まへて立つてゐる學者を要求する(中略)。さう云ふ人は現代に必要な調和的要素である。然るにさう云ふ人は最も得難い(中略)。私は藤村先生を、この最も得難い二本足の學者として、大いに尊敬する(中略)。

「只大體から見れば、先生の重點は西洋文化の地面に落ちてゐた。併し随分幅広く股を開いて東洋文化の地面をも踏んでゐられた。先生は西洋文化の眼を以て東洋文化を觀察して、彼を我に移して、我の足らざる所を補はうとしてゐられた。先生は此意味に於いて種子を蒔いた人である。併し其の苗は苗の畝である。存外生長しない。それは二本足の學者でなくては先生の後継者となることができないからである。その二本足の學者が容易に出て来ないからである。そして世間では一本足の博士が、相変らず葛藤を起したり、衝突し合つたりしてゐる。」(岩波文庫版「日本開化小史」への高治隆二氏の解題より再引用)

(1) ハロッドはまた、この少年の新しい感動に対して、ツキディデスの文オロルスに視察の言葉を述べたと

いう新しい解法もそこに見出される。

(2) 坂本太郎博士「六国史について」(史学會編「本邦史学史論叢」所載)参照。

(3) 片岡良一氏「藤村物語の現代的意義」(「文学」六の十一)参照。

(4) 藤村の神皇正統記についての最近の研究として、津田左右吉博士「藤村及び神皇正統記に於ける支那の史学思想」(史学會編「本邦史学史論叢」所載)を参照せられることを希望する。単に支那の史学思想の影響を論ぜられたばかりではなく、兩篇の本質的な論点についても深い示唆を与えられる名篇である。

(5) 封建主義の一翼としての史学の詳しい分析は、大久保得謙氏「近世に於ける歴史教育」(史学會編「本邦史学史論叢」所載)を参照せられたい。特に歴史教育という観点から取上げられてるので極めて注意せられるところの多い論文である。

(6) 殊に國學者、また洋學者の活動と近代的な歴史意識の成長との關係に對する考察は、わけてもそこで重要な問題になると思うが、その点の解明を欠いたこと何れにしても遺憾である。ただ白石のところで一寸触れたように、白石の學問の進歩が(一)國學的知識との接觸に於つてゐること、また編者の活動が在學の折戻に於かれてはじめて可能であつたといふ點を更めて注意して置きたいと思う。

昨年のこと、雑誌「知性」が、若い読者たちのために、必読の教養文庫を各方面の学者や文学者から推薦してもらったことがある。そこには、百冊ほどの書名があげられていたように思うが、そのなかで、日本人によって書かれた明治以前の書物は、たった一冊、『歎異抄』だけであった。加藤周一氏が、この事実を指摘して、これは重大な問題だとどこかで書いていたのを記憶している。

また、現に中野好夫編の『現代の作家』岩波新書という本があるが、これは正宗白鳥、志賀直哉の老大家から、椎名麟三、武田泰淳などの戦後派に及ぶ二十人の作家について、どんな作家の、どんな作品から、どんな影響をうけたか、について、直接本人から聞きとった結果の報告というかたちになっている。これによれば、かれらの大部分は西洋の近代文学、それも多くの翻訳を通じて、その作家的基盤を培ったことがわかる。すくなくとも、明治以前の日本人の手になる文学によって、啓発されたというような場合はひとつもなかったように思う。

西洋の作家についていえば、かれらの伝記や回想録が語っているように、少年もしくは青年時代に身につけた自國の古典文学の伝統に、共感するにせよ、反撥するにせよ、そのなから、かれら自身の文学を生み出していることは、改めていうまでもあるまい。日本の場合は、これにくらべると、ずいぶん奇妙な現象といえよう。そのくせ、一般にこのことを奇妙とは感じていない。それほど奇妙な現象である。現代文学によって、われわれの精神が代表されるとすれば、われわれの古典は、日本にはなくて、西洋近代文学の翻訳だということになる。なんとしても、おどろくべきことである。無論、これにはこれで複雑な原因があつて、単に文学だけの問題ではない。

だが、そういう奇妙な現象のなかで、わずかの例外がないわけではない。わけても、西鶴なぞは、例外中の例外であろう。

長い間、忘れられ、埋もれていた西鶴が、新しい関心の対象になってきたのは、明治二十年代のはじめ、淡島寒月らの発掘によるものとされている。西鶴の好色物の着想や文章が、紅葉、露伴、一葉らの創作活動に与えた刺激と影響の大きさは、紅葉の『伽羅枕』、『三人妻』、或いは露伴の『風流艶麗伝』などが、露伴なまでに語っている。これらの新作家の活動に先行する小説理論として、明治十八年に坪内逍遙の『小説神髓』があるが、小説は、教化のための手段ではなく、人情風俗を写すべきもの、人情とは何か、「百人煩惱これなり」というのが、その骨子であった。人間のあらゆる欲望を写すことによって、生きた人間を描くべきものが小説だといふのである。日本における小説宣言ともいふべき、『小説神髓』の、この主張は、はしなくも合致したのが、「人間は慾に手足のついたものぞかし」という西鶴の人間観であった。『小説神髓』の示した線上に見れた紅葉、露伴が、西鶴に導きを仰いだ事情は容易に納得できよう。

西鶴復活の新しい機運に対して、はげしい反撥を感じ、これを打破しようとした別の新しい動きがあった。「文学界」一派の活動がこれである。わけても西鶴排斥に最も戦闘的だったのは北村透谷である。ロマンチスト、キリスト者、デモクラットたる透谷が、「人間は慾に手足のついたものぞかし」ということき人間観に反撥せざるをえなかったのは当然である。「粹を論じて伽羅枕に及ぶ」という評論が語っているように、透谷は元禄文学の美的理念たる「粹」の基盤たる「好色」に、近代的な「恋愛」の観念を対置することによって、西鶴、近松を中心とする元禄文学とその復

活としての紅葉とを、同時に排斥したのである。その排斥と否定は、そのままかれら自身の文学の主張でありえたこといまでもない。こうして、明治二十年代の中ごろは、西鶴の復活と、その排斥のなかに、明治の新文学は出発したのであった。

それから、約十年、自然主義のはげしい動きのなかで、透谷もまた見落していた西鶴のあびて、再び新しい意味を発揮してくる。紅葉、露伴とともに、透谷もまた見落していた西鶴の一面が、島村抱月や田山花袋らによって見出されるのである。花袋は、モーパッサンから学んだ眼によって西鶴を見直したとき、はじめてその新しい意味を発見したという。花袋によれば、金を直接扱った作家というものは、これまで日本にはなかった。西鶴にいたって、はじめて金を扱った。金を物質と考えるような単純な境地では、とうてい金というものを理解することはできない。西鶴は、金すなわち心という境地にまで達している。自分は小説家として、女は、どうやら描けるようになったが、金を物心一体として描くことはむずかしい。女には詩があるが、金にはそれがなかった。本来、詩というものがない金を描いて、真実に達するというようなことは、容易ではない。西鶴はそれを見事にやっているというのである。

つまり、紅葉、露伴にしろ、透谷にしろ、西鶴については、好色物しか問題にしなければならぬ。花袋によつて、その町人物が、はじめて大きな意味を見出されたわけである。そして、この場合、花袋は自然主義の作家としての自分の立場と主張のほうへ、西鶴を引き寄せて見ていることを見おとすわけにはいかない。西鶴を自然主義好みのキマジメで、深刻な人生観察者に仕立てているのである。「悲愴な心境」ということを見かたにしても、花袋自身の私小説ふうな作家境地を西鶴に見出していること露伴なまでに語っている。学者としてなら問題はあろうが、作家は、何をどのよう

にうけとらうと、自分の文学活動の根柢に培うことができればいいわけである。花袋によつて、一たび、このような西鶴理解の道が開かれると、多くの現代作家によって、西鶴への関心が高められた。後になって、花袋と同じく自然系統の作家、正宗白鳥が、声をきわめて西鶴を礼讃したのも、ゆえなきことではない。好色物を描きつづけて、糊糊の極、平淡に達した晩年の『置土産』を読むにいたって、西鶴に対し、自分とはほんとうに帽子をぬごうという気持ちになったと白鳥は書いている。この短篇集に描かれている色慾生活のどんづまり、人生のどんづまりの心境が白鳥のめつたにぬがない帽子をぬがせたのだ。白鳥もまた白鳥なりに、西鶴を味わったのである。自然主義の作家だけが、西鶴に関心をむけたのではない。志賀直哉は、『暗夜行路』のなかで、日本の小説家では誰が一ばん偉いかというお茶の質問に、謙作をして、そりや西鶴だ、と躊躇するところなく答へさせている。志賀直哉は、『二十不孝』の最初の二つに敬服していたらしい。あれはあまりというほど徹底している。あのように無反省に、残酷に人間を描くことは自分にはできない。親不孝の条件になることをならべたててはできても、それをああいふ強いリズムで一貫して描くことはできないと言っている。これもまた、制作に臨んだ作者の心のリズム、その緊張感という、自分の体験と信条に即して西鶴を鑑賞しているのである。

二 概念の理解と訳字

——語と表記の乖離の問題——

序に述べたように、キリシタン時代から約一五〇年遅れて発達した蘭学とさらに約一〇〇年遅れた英学とは、翻訳の方法の上からは連続線上にあると思われるので、本章以下は方法上問題と思う項目によって章を立てることにする。

本章の「概念の理解と訳字」という問題は、副題に示したように現代からは想像しにくい「語」と「表記」の乖離をめぐる翻訳上の問題である。

たとえば、柴田昌吉・子安敏『蘭辞英和字彙』(明六)はその増訂第二版(明一五)とともに近代辞書の先駆をなす画期的な業績といつてよいが、この辞書の訳語法とヘボン『和英語林集成』(慶三)の英和の部の訳語法とを比べてみよう。ヘボンと比べる理由は、

balcony ムン(縁) / エンガワ(縁側) / クワイロー(回廊)
citizen ヒト(人) / チョーニン(町人) / ニンハツ(人別)

の次に見られるように、ヘボンはキリシタン時代に似て、英語の概念を在来の普通の常用語で置き換えているからである。ヘボンの英和の部から名詞(英語の見出し語)一八三語を拾ったが、このうちの「一六語は『英和字彙』初版でも同じ訳を見出すことができる。しかし、同じ訳とはいっても、一方はローマ字、他方は漢字にルビという表記法で、果してこれらと同じ訳語と見ていかどうかには、いささか疑問がある。

1 Kōwaza 譯(adge) 灰(ash) 痘(ague) 算術(arithmetie) 天人(angel) 解剖(atomy) 軍勢(army) 大望(ambition)

2 Mamori 護符(amulet) 豊饒(fluence) 疹前(ache) 款茶(article) 高手(adepi) 算計(accountant) 狀師(ad-vocate) 酒癖(abssess)

3 Saka 葎(ack) 相識(aquaintance) 賑濟(alms) 諺談(aduration) 懸慮(anxiety) 腐巷(alley) 懸賞(accomplice) 武庫(arsenal) 墮胎(artition) 俳優(actor)

最初の語だけヘボンのローマ字綴りを出しておいたが、下の語も同様にヘボンの訳と『英和字彙』のルビとが一致する。1の類は五九語あってルビと漢字表記が対応しているので、ヘボンと同じ訳語と認めてよいと思う。2のaは二四語、bは三三語あるが、ともにルビと漢字表記が対応していない。ルビの方が正式の訳語で漢字は単なる宛字にすぎないと解すればヘボン訳と等しくなるが、漢字の方が正式でルビは意味の注だと解すればヘボン訳と異なることになる。特に2のbは、その表記がロブシャイド『英華字典』の中国語訳と一致し、おそらくはその借用と思われるから、一体当時の人がルビと表記のどちらを正式と考えていたのか、現在からはなかなか判定しにくい。

とにかく、明治六年の時点で、「一六語の約半数の五七語にルビと表記の不一致があり、さらにその中の三三語が中国からの借用というのは現代の常識にそぐわないものがあるが、実は、これこそ江戸期の伝統を受継ぐ訳語作製の典型的な方法であったと考えられる」というのは、江戸から明治の初期にかけて翻訳者たちには概念(語の意味)の理解とそれを字に書き表すこととは別次元の問題で、どちらかという概念の理解より文字表記の方に苦心した節があるからである。

たとえば「證厄利亜語林大成」(一八一四)は、「叙」に概念解釈の経過、そして「題言」に漢字表記の苦心に触れて次のように述べている。

「(叙)文化已已航來の蘭人揚骨郭步陸無忽釋なる者是を能するを以て特に命ありて崎陽に祇役せしめ我訳家茲に肇て其業を創る事を得たり——略——斯に於て證厄利亜所有の言詞悉く纂集訳取し傍ら参考するに和蘭の書を以てし猶疑きものは私郎察の語書を以て親訳再訂し、遂に翻して皇國の俗言に備會し是に配するに漢字を以てし再に裝と寫とを歷る事二回にして此書始て成る

「題言」一語を訳するは甚易きに似て反て難きものなり其故は一語を以て其意義を尽す事能はざるものあり況や又我輩庸淺本より漢土の字彙に暗し、故を以て対字母ら漢語をもつてせんとする時は自ら其本来の面目を失するに至る事あり、今是を悉く俚俗の語を以てする時は譯難煩雜にして其酸きか如くなるに嫌あり故に其当否は知らずと雖とも訳字は必漢字を以てし而して其際問或は俚俗の語を下に記して其面目を失わざらしめんとす是皆已む事を得ざる一端より出るなり

この辞書は日本人が英語に取組んだ最初のもので、二年の歳月をかけて苦労したことは察するに余りあるが、「叙」の概念の解釈の方は英語のできる蘭人ヤンコック・ブームホフについて言詞を集めて訳取し、傍ら蘭書を参考にし、疑しいものはフランスの語書によって何回も検討して、遂に翻して皇國の俗言に備會したということである。その慎重な仕事ぶりが如実に表現されているが、全体としては形式的な経過報告という体裁になっている。それに対して、この作業の過程で実感した問題や方法上の困難およびその対策を正直に告白しているのは「題言」の方である。第一は「一語を以て其意義を尽す事能はず」という翻訳そのことに内在する根本問題、第二は、対字は専ら漢語にしたいが、これで押通すと英語本来の概念を見失う(本来の面目を失する)おそれのあること、第三は、俚俗の語で訳すと概念は伝えられても譯難煩雜で酸いという欠点のあること、結局、第四は、その便法として当否は知らず訳字には漢字を用い、時に俚俗の語で法を施すことにしたというのである。その翻訳の実例を見ると、特に苦心したと思われるものは、

偏置(aside) 竊賊(to abide) 竊賊(to arm)
守又勾会(定奪)(to acquit) 臥單(bed)
風鈴(band for the neck) 差午(after noon)
担夫(porter) 書買(book-seller)

となっており、この漢字表記は、近世中国語を集めた柴野栗山『雑字類編』所収の表記と一致する。編纂者が、皇國の俗言に備會した上で、いかに格式ある漢字を當てることに腐心したかを物語っている。「題言」には「訳字」という語を使っているが、概念を示す俗言だけでは不完全で、これに格式ある漢字を當て得て、初めて訳述が成立すると意識していたのではなからうか。

第一に、漢語もしくは漢訳仏典に典拠を有し、以前に本邦の文献に用例の指摘できるものがある。その例は次の如し。

- ◎時辰(△) 時鐘 以上 位置 一室 一家百 一種 一身 一對 一定 医道 抑鬱(△) 委任(△) 咽喉 飲食 隠匿 除毛 運輪 運動(△) 術運(△) 采色(△) 費 円形 延長(△) 往双 往来 ①会合(△) 解体 解剖(△) 外而 海路 鷓牛 各自 学者 化成(△) 下部 置置(△) 開眼(△) 疑急 監獄(△) 因節 肝胆 眼中 眼面 眼目 寒冷 奇異 機因 氣息 逆行(△) 逆流(△) 究竟 停止(△) 田賦 牛陌 狹隘 驟結(△) 暴急 近世 緊密 近來 空虛 空弱 屈曲(△) 屈伸 区分(△) 調停 條重 形象 形狀 結成(△) 結束(△) 欠乏(△) 血脈 脈弱 耳聾 謹讓 剛然 剛著 口外 交結 光彩 交接(△) 交接 口中 高紙 厚薄 傲慢 肛門 呼吸 古今 古人 骨體 肢動 古來 詭交(△) ①最少 精誠(△) 左方 左右(△) 作用 參考(△) 散在(△) 散布(△) 借牙 自家 資給 子宮 自己 事故 自在 四肢 指示 自然 死地 膝下 通管 室內 疾病 固忍 死亡 車軸 自由 周圍 襪襪 柔軟 收納(△) 收斂 熟說(△) 出生(△) 樹木 瀝取(△) 使用 消化(△) 蒸氣 上下 小兒 腫成(△) 消滅 上面 滋養(△) 灸術 切字 女道 食糧 詰實 所在 諸子 諸書 風女 諸病 諸疾 反弱(△) 人身 深淺 心臟 身体 人体 甚大 神妙 身命 神明 人類 隨登 水晶 水中 山道(△) 國說 頭腦 情液 生活 性質 生殖(△) 成人 精神 生成 製造(△) 情藏 驚頓(△) 接收(△) 聚散 前後 全身 全体 增長(△) 臟腑 遺物(△) 咀嚼(△) 損傷(△) ①休養 大小 脫出(△) 短細 胆汁 男女 短小 端末 知覺(△) 直腸 中央 中心 頂上 取腹 治療 展開(△) 天工 伝送(△) 同志 動靜 透徹 同等 動搖(△) 道路 突出 努力 ①内外 軟骨 二途 雜屬 ①附乘(△) 白色 發明 飛揚(△) 万象 著航 反復 軟細 非常 皮膚 潤澤(△) 研原 敏捷 腐朽(△) 不深 扶助 付取(△) 物業 物取 潤滑 留(△) 賦与(△) 分解(△) 分散(△) 分布(△) 分別 分重(△) 介明(△) 便利 防護(△) 助賊 方術 保護(△) 推拒 木質 凡人 木体 木然 凡庸 ①延延(△) 脈絡 無敵 無用 名家 名探 名哲 命名 毛髮 煥然(△) 煥安(△) ①發行(△) 齊儀 ①羅列 陸起 京氣 慨然 兩端 兩頭 兩

第二に、漢語もしくは漢訳仏典に典拠を有するもの、國語として以前に用例があるか否か明らかでないものの例をあげると次の通りである。

- ◎愛惜(△) 維持(△) 咽喉 運行(△) 運川(△) 音響 音孔 ①金瓶 外形 回轉 外部 外辺 活動(△) 下辺 眼臉 眼孔 響響 貫通(△) 響定(△) 官能 強固 空同 區別 形質 広闊 考究 合同 口内 後部 懸点 眞勝 ①細小 索引 銷踪 筋骨 至細 疾患 磨磨 聚合(△) 充契(△) 收縮 重層 縮小 潤滑 卑則 詳說(△) 上層 上辺 女子 内式 新説 精確 骨椎 接近(△) 接合(△) 尖銳 全形 穿孔 先哲 全處 前部 先務 送迎 削見 塵生(△) 遠成(△) 粗糲(△) ①胎兒 大別(△) 大洋 多肉 毗毗 中間 中部 著世 定期 適合 摘出(△) 紙卷 動機 突起(△) ①内部 内面 軟弱 日常 乳頭 粘液 弱弱 ①破壞 比較(△) 鼻孔 微小 表裏 腹腹 不測 付着(△) 復帰(△) 部分 分派(△) 差別(△) 結合(△) 包蔵(△) 保持 ①清濁 名状(△) 名目 網羅 ①抽出(△) 輸送(△) 覆覆(△) 要務 余勢 予防 ①理會(△) 裏面 適合(△) 連接 抽出(△)

第三に、漢語または漢訳仏典に典拠を見いだすことができないが、以前に國語の用例が存するものがある。その例をあげる。

- 横腸膜 外邪 因節 管中 氣管 記憶(△) 機軸 危弱 近傍 結着(△) 口技 甲狀 合成(△) 鼓膜 產科 產出(△) 十二指腸 神經 体外 体中 指門 精神 腫脹 頭蓋(△) 動脈 透明 骨介 付着(△) 腹内 幅廣(△) 分曉 複複 官腸 腹推 卵果 流産 流動

ここでは、漢語または漢訳仏典に典拠を見出しえず、更に國語の用例も確かでないものを次にあげる。

- 胃液 一直線 右辺 運管 液汁 円管 円球 汚物 滲漏 各部 角膜 滑車 括約(△) 下腹膜 眼球 起因 漏精(△) 究明(△) 胸節 緊要 筋肉 具有(△) 血液 血行 血中 取液 強進(△) 取名 口舌 喉咽 呼吸 維持(△) 因着(△) 竹膜 藥結(△) 取束(△) 散取 交動 離化(△) 小腦(△) 靜脈 刺余 抽完 諸説 胃室 因液 成腐 西哲 胃臟 液膜(△) 接引(△) 織細 尖端 膠漆 筋腫(△) 挿入(△) 大腸 妥當(△) 單純 注入(△) 適宜 膈孔 肉片 尿管 膀胱 排液(△) 皮下 尾鞭(△) 表皮 裏面 腹筋 分格(△) 包圍(△) 束拍 末端 密接 網膜 環動 油脂 輪指骨 輪尿管 要具 連係(△) 連結 筋間 弓曲(△)